

2017年の虫害とその後2年間の取組

杉 江 喜 寿

Damage from insects in 2017 and how to correct them for the following two years

Yoshihisa SUGIE

山口県立山口博物館研究報告

第46号(2020年3月)別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.46(March 2020)

2017年の虫害とその後2年間の取組

杉江 喜寿¹⁾

Damage from insects in 2017 and how to correct them for the following two years

Yoshihisa SUGIE

Abstract

The distribution of risk management based on understanding a storage room condition, Damage from insect in 2017 and how to correct them for the following two years.

1 はじめに

当館の本館建屋は、昭和42年（1967年）10月に改築して開館し現在に至っており、2019年には建築後52年を迎えた。動植物収蔵室（写真1）、生物資料庫（床面積116.64㎡）は、以前は図書室として使用されていた部屋を動植物専用の収蔵室として利用することになったため、これまでも窓側の温度上昇などさまざまな問題を抱えていた。（写真2）

そのような動植物収蔵室における管理の実態や、2017年度に発生した虫害とその時点での対策についてはすでに報告している（シバンムシによる虫害対策.山口県立山口博物館研究報告第44号.2018）が、本稿ではその後2年間の取組や虫害の実態を報告するものである。



写真1 動植物収蔵室内



写真2 室内南側周辺

1) 山口県立山口博物館（植物）

2 2017年の虫害とその時点の改善点

2017年8月中旬に南側周辺部のプラスチックケースのうち、南側の窓側に置いていたケースの1つを点検したところタバコシバンムシの発生が確認された。虫害の確認後、緊急対策としてすべての金属ロッカー（収蔵庫）とプラスチックケースにナフタレンを追補充し、そのうえですべてのプラスチックケースにはピレスロイド系（エンベントリン）の薬剤を追加した。その後、充電式の収蔵庫専用の掃除機を購入した。

11月下旬には南の窓側に置いていたプラスチックケース約150個すべてに酸化エチレンを主成分とするガス燻蒸を実施した。（6月の全館害虫防除は炭酸ガス製剤 プンガノン等使用）さらに11月27日に遮光工事を実施し、本来の遮光だけでなく断熱効果も期待して、アルミの間に発砲ポリエチレンを挟んだ3mm厚のアルミ複合板で遮光した。

3 2018年以降の虫害発生状況と新たな取組

（1）2017年秋から2018年秋までの状況

2017年の秋から冬にかけて遮光工事や燻蒸などの虫害対策を実施した上で、念のために、タバコシバンムシ用フェロモントラップ（富士フレイバー株式会社製 NEW SERRICO）を購入し、収蔵庫内3か所に設置した（写真3）。春までは全く成虫の発生は見られなかったが、2018年の6月になり気温・室温が上昇してくると懸念していた通り数匹のシバンムシがトラップにかかっていた（写真4）。収蔵庫のどこかで生き残った固体がいたのか新たに侵入したのかはわからないが、前回のような収蔵プラスチックケース内などに発生した状況やその後の発生は見られなかった。遮光板の設置と空調装置の春季からの使用によりケース内の気温の上昇が抑えられることで、シバンムシなどの発生条件が悪くなると同時に、薬剤のムダな昇華による消失も抑えられるので対策の効果が持続しているものと考えられる。



写真3 シバンムシ用トラップ



写真4 トラップにかかったシバンムシ

（2）2018年の追加の対策

厳しい財政状況の中で、夏前に追加の対策として植物動物収蔵庫の入り口に足拭きマットを設置し（写真5）、収蔵庫入口のドア、その全室と展示室前階段のドアに隙間テープを貼った

(写真6)。これは防虫だけでなく、もともと構造的に展示室と以前は図書室であった動植物収蔵室の距離が近いという問題を抱えているので、多くの来館者が利用する展示室と防虫剤を使用している動植物収蔵室との間で多かった空気の出入りをこれまでより遮断できるという効果も期待してのことである。

また、植物標本を寄贈してくださるサポーターや県民の方などに搬入する前の植物標本の確実な乾燥をお願いすると同時に、当館に搬入していただいた後に収蔵庫に配架する前に実施している期間をあけての2度の燻蒸室燻蒸を改めて徹底することとした。



写真5 足拭きマットと収蔵室掃除機



写真6 隙間テープ

(3) 2018年秋から2019年の様子と今後の管理について

2018年秋以降は発生する様子は見られなかったが、2019年夏季になると数匹のシバンムシがトラップにかかっていた。しかし、前年度同様その後の継続的な発生状況は見られず、対策の効果が見られたものと判断している。

南側に保管していて最初の発生源と思われる約150個の標本入りプラスチックケースについては、今年度も当館サポーターの方の協力を得て、順次ピレスロイド系（エンペントリン）の薬剤の交換を実施するなど対策を1つ1つ進めている。

しかし、現在重点的に入力などの処理を進めているこれらのプラスチックケース内の標本以外に、まだデータ入力や台紙貼が実施できていなくて入力や収蔵庫への配架待ちの標本入りのダンボール箱が多数ある(写真7)。これらは決してよい保存環境とは言えず、中には以前に



写真7 収蔵庫上部の様子

シバンムシ等が発生していた痕跡が見られるものも見つかっており油断はできない。

このような状況下においては、以前にも報告したが収蔵庫やケース内での薬剤の使用の現時点での全廃は厳しいと考えている。また収蔵庫内への標本搬入時の十分な乾燥や燻蒸、収蔵標本の点検、収蔵室の温湿度管理等についてはこれまで以上に慎重に実施し、年に数回しかできなくて有害である燻蒸室でのガス燻蒸以外にも凍結燻蒸等の導入も検討していく必要があると考えている。

2年前よりさらに厳しい財政状況の中、施設・設備面での改善は費用的に難しいものが多いが、県内のみならず全国からの貴重な標本等を保管している館として、他館での取り組みを参考にさせていただくとともに、館員やサポーターの協力を得ながら、今後も油断することなくIPMの理念に基づいて総合的な対策を積み重ね、注意深く対策を進めていきたい。

5 参考文献

山口県立山口博物館研究報告第44号. 2018

文化庁文化財課.文化財の生物被害防止に関する日常管理の手引き. 2001